

国家モラロジを考える



中央大学特任教授・千葉工大特別教授
元モンゴル駐劔特命全権大使

清水 武則

国際情勢と動向

残念ながら、ロシアによるウクライナ侵攻と多くの民間人の虐殺は、第二次世界大戦後に構築されてきた平和のための処方箋がたいして役に立たないことを証明しました。私は大学で国



清水 武則氏

際関係論を講じていますが、今日の世界秩序が国家間の信頼に基づいて成立すること、即ち、国家主権とか人権の尊重とか、条約の履行義務といった国際法上の諸原則は、それを守ろうとする国にとっては意義があるものの、それを守らない国があっても、国際社会には完全に阻止する手段はないこと、国際司法裁判所や国際連合といった国際機関も問題解決の手段にならないことなどを学生に話しています。ウクライナでの一般市民の大量殺人は、ジェノサイド条約違反だと思いますが、ロシアはジェノサイド条約や人権規約の締約国です。私は本稿でモンゴルでのモラロジを論じようとしていた矢先にウクライナ侵攻が発生したため、人のモラロジがあるなら国家という法人にもモラロジがあるべきではない

かと思いました。そして、国際社会のモラロジとは国際法や条約を誠実に遵守することであり、現実がそうならないのを見て、国内のように強制的に問題解決を図れる組織のない国際社会におけるモラロジの確立は極めて困難であると痛感しています。つまり、西側先進諸国が、基本的人権の尊重、言論・表現の自由、政治活動の自由など、民主主義的な理念を普遍的な価値のあるものとして強調しても、それを認めない国があった場合には、最後は武力による解決へと行かざるを得ない恐れが極めて高く、必ずしも普遍的価値観を有する国が勝利するとは限らない現実があることに胸が痛みます。

（当時）の支援を得て、中国から独立しました。中国（中華民国）がモンゴルの独立を承認したのは一九四七年です。そして、一九九〇年に民主化を達成するまでロシア共産党の強い影響下にありました。この間、一九三七年には僧侶などが二万人も粛清されたり、現職の首相が日本のスパイだと決めつけられてモスクワまで連れていかれて処刑されたりする事件があり、モンゴルは形式的な独立と引き換えに国民の命さえ犠牲にしてみました。また、一九三九年にはいわゆるノモンハン事件（モンゴル側はハルハ河戦争と呼ぶ）が発生し、日本とソ連・モンゴル連合双方で一万五千人以上が死亡しました。一九四五年八月にはソ連の対日宣戦に同調してモンゴルも参戦し、一万二千人余の日本人捕虜が戦後二年間にわたって強制抑留されました。これらの一連の事実は、モンゴル

におけるロシア支配が強化される過程でおきたできごとでした。日本人捕虜は今も使用されている外務省やオペラ劇場等を建設しモンゴルの近代化の基礎を築きました。一九九〇年の民主化は、こうした社会主義体制とロシア支配に対して、民主化と市場経済化という切り口でモンゴルの若者たちがチャレンジするものだったのです。

モンゴルの発展

社会主義時代には、私のような資本主義国の外交官は、普通にモンゴル人と一緒にモンゴル語を学習することはできず、モンゴル国立大学の特設コースでベトナム人留学生とともにモンゴル語を学習しました。この時代は、為政者は絶対権力者でしたが、モンゴルの国家を考える人が多く、ソ連の絶対的な影響下で、もがきながらも民族の発展を考えるという苦しい時代でした。他方で、士気は高く、汚職などのモラルの低下は聞かれ

ませんでした。一般国民は、西側諸国の人々との交流は制限され、物資は不足し、米国のジーンズなどは若者にとっては手の届かないものでした。外国製品を販売するドルショップというのがあって、主に外国人や、何とかドルを手に入れるのできた幸運なモンゴル人のみが入ることができました。しかし、この時代には為政者と一般



庶民との経済格差もそう高くはなく、皆がつつましやかな生活を送っていました。私は、社会主義体制下の自由のない酷さを自ら味わっていたので、社会主義体制を好きになれませんでした。道徳心の観点からはこの時代は問題が少なかつたと思います。

日本との関わり

略的なパートナーシップを構築するまでに至っています。「苦しい時に友の価値が分かる」というモンゴルの諺を引いて、日本からの支援に謝意を示してくれました。個人のモラルを論じることは、人としてあるべき資質を論じることだと思いますが、国家のモラルを論じることは難しい。人が集まって国家を形成すると、国家のモラルの基本は国家の生存権を如何に確保するかということが、他の諸国との関わりの中の基本になってきます。国家の政策次第で、国民に期待するモラルも変化してきます。しかし、いかに正当化されようと、人の命を勝手に奪うことは許されない。これは人間として守るべきことだと強く思うこの頃です。それは人間の集まりである国家としても絶対に守るべき道徳ではないでしょうか。

一九九〇年以降日本は、民主化や市場経済化を諸外国の先頭になって支援しました。自らモンゴル支援国際会合を世界銀行と共催して計一〇回実施し、モンゴルの体制変換により求められる多大の財政負担の解決を図りました。中国はこのようなマルチの支援枠組みには全く関心を示さなかつたが、今考えれば、社会主義体制に影響をもちたらず民主化支援に中国が協力しないのは当たり前かも知れません。日本の援助を通じて、日本とモンゴルの関係は飛躍的に改善され、今日、日本とモンゴルは戦

対談動画「遠くて近い国モンゴル」
<https://youtu.be/OoEBKtHL5ik>

